

# 官民連携による亀の瀬地すべり インフラツーリズムの取組について

田尻 一朗<sup>1</sup>

<sup>1</sup>近畿地方整備局 大和川河川事務所 (〒582-0009大阪府柏原市大正2丁目10番8号)

昭和61年に、国が行う地すべり対策工事の内容等を工事見学者等へ説明するための施設として、亀の瀬すべり歴史資料室を設置。平成28年度からは、全国的に本格化したインフラツーリズムを亀の瀬でも開始。さらに令和2年、亀の瀬地すべりを含む「龍田古道・亀の瀬」が日本遺産に認定され、令和3年には、亀の瀬を訪れる来訪者は年間約2万人を超えた。

しかしながら、亀の瀬には、観光拠点として必要な休憩スペースや物販、その他サービスの提供等がなく、観光地としてもっと盛り上げたい地元自治体及び民間事業者等から、亀の瀬地すべり歴史資料室のリニューアルを期待する声が多く寄せられた。

そこで、亀の瀬地すべり歴史資料室のリニューアルと合わせ、亀の瀬地すべりインフラツーリズムを核とした地域の賑わいを創出する拠点整備・運営体制を官民連携により構築した。

本研究では、その取組について報告するとともに、今後、亀の瀬地区その他周辺地域を賑わいのある地域として持続的に活性化、発展させる取組するものである。

キーワード インフラツーリズム、まちづくり、官民連携

## 1. はじめに

亀の瀬地すべり地帯は、奈良県三郷町と大阪府柏原市にまたがる大和川が奈良盆地から大阪平野へ流れ出る狭窄部に位置し(図-1)、約4万年前から地すべりが繰り返されてきた難所でありながら、古代より都の西の玄関口・交通・経済・治水の要衝として、飛鳥時代には既にこの地に「龍田古道」があったが、地すべりが頻発する恐ろしい場所とされてきた。長い歴史の中でも最大規模の地すべりが昭和初期に発生し、国鉄関西本線の亀の瀬トンネルが崩壊し運転休止、大和川が堰止められ上流側で浸水被害が発生するなど、猛威を振るった。昭和35年より国による本格的な地すべり対策工事を開始し以降、約1000億円の予算、60年以上の歳月を投じ、現在も対策工事を進めている(図-2)。



図-1 亀の瀬地すべり対策 位置図

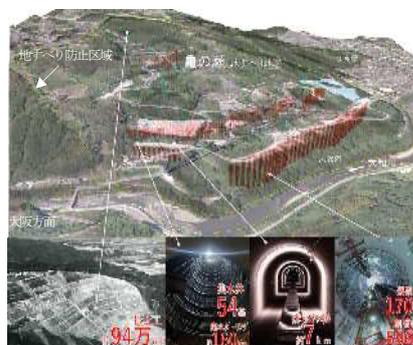


図-2 亀の瀬地すべり対策 事業内容

昭和61年に国が行う亀の瀬地すべり対策工事の内容を説明する施設として亀の瀬すべり歴史資料室を設置

(図-3)。平成28年度からは、全国的に本格的なインフラツーリズムを亀の瀬地すべりでも開始し取組を進めてきた。亀の瀬地すべりインフラツーリズムでは、平成20年度に地すべり対策区域内で偶然発見した「旧大阪鉄道・亀の瀬トンネル遺構」と既存の雨水排水トンネル内の見学とあわせたコースが人気となっている(図-4)。

令和2年には亀の瀬地すべりを含む「龍田古道・亀の瀬」の地域の歴史的魅惑や特色を通じて我が国の文化、伝統を語るストーリーが認められ、日本遺産「もう、すべらせない!!～龍田古道の心臓部「亀の瀬」を越え

てゆけ〜」として認定された。その後、国、三郷町と柏原市が連携し、地域活性化を目的に日本遺産推進協議会を新たに組織、日本遺産観光に関する社会実験の実施や、お土産物開発(図-5)、地域全体で観光振興の取組を開始。

令和5年1月には、亀の瀬トンネルを活用したプロジェクト上映開始など、亀の瀬地すべりインフラツーリズムと日本遺産観光を合わせた観光が話題となり、同年の年内来訪者数は約2万人を超えた。

さらに、令和5年8月に国土交通本省総合政策局が押し進める「インフラツーリズム魅力倍増プロジェクトモデル地区」に亀の瀬地すべりが新たに選定され、今後、亀の瀬インフラツーリズムの魅力を発信し、魅力を倍増させ、更なる来訪者増加を目指すこととなった。

しかし、来場者が増えるにあたり、資料室や駐車場のスペース不足が表面化(図-6、7)、また、資料室の老朽化により雨漏りが発生するなど来訪者の受け入れ環境に関する課題が浮き彫りとなってきた。更に、日本遺産として日本遺産観光に関する社会実験、お土産物開発等を進めているものの、現地で物販その他サービスを提供できる拠点・運営体制がないことから、観光地としてもっと盛り上げたい地域住民や民間事業者等から亀の瀬地すべりインフラツーリズムの抜本的なリニューアルを期待する声が多く寄せられた。そこで、これらの課題解決を目的とし、3つの「つくる」取組を行った。

本研究では、国・大阪府柏原市・奈良県三郷町等の行政関係者と、地元民間企業団体「柏原市マイクロツーリズム推進協議会」・ボランティアガイド・地元住民等が連携し、亀の瀬地すべり歴史資料室のリニューアルと合わせ、亀の瀬地すべりインフラツーリズムを核とした地域の賑わいを創出する拠点整備・運営体制を官民連携により構築した取組や、今後、亀の瀬地区その他周辺地域を賑わいのある地域として持続的に活性化、発展させる取組について報告するものである。



図-3 亀の瀬地すべり歴史資料室(昭和61年整備)



図-4 亀の瀬地すべりインフラツーリズム実施状況



図-5 日本遺産関連のお土産物



図-6 資料室内のスペース不足



図-7 資料室前の道路上での来場者降車状況

## 2. 課題解決の取組

### (1) 3つの「つくる」取組

老朽化と狭小な現亀の瀬地すべり歴史資料室に替わる新たな資料室を「つくる」、来訪者に満足いただく民間事業者による土産物物販やボランティアガイドによる案内等を持続的に行うための運営体制を「つくる」、亀の瀬インフラツーリズムの魅力を倍増させ、亀の瀬地区その他周辺地域を賑わいのある地域として持続的に活性化、発展させていく仕組みを「つくる」、あわせて3つの「つくる」の取組を令和5年度に実施した。



図-8 3つの「つくる」取組

(2) 実施内容

a) 新しい資料室を「つくる」

(令和5年6月から令和6年3月)

新しい資料室は、昭和61年に整備した資料室と同様に工事期間中の仮設物として、新たな拠点整備として、亀の瀬インフラツーリズムの核となる施設となり、亀の瀬らしさ溢れる親しみやすさと、十分なスペース、民間事業者による土産物販やボランティアガイドによる案内等の運営体制を考慮し、新たな亀の瀬地すべり歴史資料室を「つくる」取組を実施した。

<具体的な実施内容>

- 親しまれる亀の瀬らしさのデザイン設計
- 十分な観覧スペースの確保
- 地すべり災害と対策工事を可視化した展示
- 大型車両や普通車等十分な駐車スペース確保
- 物販(お土産物)スペースの確保

b) 持続可能な運営体制を「つくる」

(令和5年10月から令和6年3月)

インフラツーリズムの運営にあたっては、すでに活躍していただいている地元のボランティアガイドによる来訪者案内の全開館日での実施と、地元民間事業者団体による土産物等の物販その他サービスの提供を、持続可能とする運営体制を構築する必要があるため、意見交換を重ね持続可能な運営体制を「つくる」取組を実施した。

<具体的な実施内容>

- ボランティアガイド代表者との意見交換会
- 地元民間企業団体「柏原市マイクロツーリズム推進協議会」との官民連携協定締結に向けた意見交換

c) 亀の瀬地区周辺の賑わいを「つくる」

(令和5年12月、令和6年1月)

新たな拠点整備・運営体制を構築した後、亀の瀬地すべり対策インフラツーリズムにより賑わいを創出し、地域の観光振興を進めるため、亀の瀬地区周辺の賑わいづくりに関心のある地域住民の皆さんと亀の瀬魅力ある賑わいを「つくる」取組を実施。

<具体的な実施内容>

- 日本遺産推進協議会による観光プラン社会実験
- 観光振興ワークショップの実施

3. 各種取組内容

(1) 新しい資料室を「つくる」

a) 重点的に取り組んだ点

仮設建築物を活用した資料室とした。また、平成20年度に発見した、旧大阪鉄道亀の瀬トンネル、蒸気機関車をイメージした資料室及び修景デザイン、展

示空間、十分な駐車スペース等の確保を行うこととした。

更には、地中の見えない地すべり対策施設と昔の地すべり災害の可視化、来場者が理解しやすい展示内容とするよう配慮した。

b) 工夫した点

資料室全体の修景デザインを検討するにあたっては、全国の鉄道会社の車両や駅舎等のモビリティデザインを手がけている専門家の(株)イチバンセン 川西康之氏に依頼し、亀の瀬トンネルや蒸気機関車をイメージした親しみのある特徴的なデザインとして設計していただいた。また、設計時には、将来的に、資料室周辺で賑わい創出が可能なスペースを考慮するため、地元地元民間企業団体の意見も取り入れ設計を行った(図-9、10、11)。

また、展示内容は、教育機関による防災教育等で使いやすく工夫する必要があったため、資料室の展示計画や防災教育に関する専門家の東京学芸大学 吉富友恭教授に依頼し、旧資料室での教育関係者等を対象とした来場者行動観察調査等を実施することで、展示資料や展示空間の特徴、問題点を確認した。また、展示物(案)を作成し、小学校の生徒にアンケートをとることで、見る人の動線やレイアウト、説明内容を改良し展示パネルを作成した(図-12、13)。

更に、パネルだけではなく亀の瀬周辺の地形を立体で把握できるようにするため、全国のトンネルツーリズム等の専門家の総務省・地域力創造アドバイザー 花田欣也氏に依頼し、大人から子供までが、楽しみながら俯瞰的に亀の瀬全体が理解できるように亀の瀬ジオラマを作成した(図-14)。また、地中の地すべり対策施設が理解しやすいように地中の施設を可視化できるようにCIMを活用したパネルや動画作成した(図-15)。



図-9 資料室周辺の配置計画と資料室ロゴ



図-10 新・亀の瀬地すべり歴史資料室 全景



図-1 1 賑わい創出スペースの確保状況



図-1 2 行動観察調査・生徒へのアンケート実施状況



図-1 3 アンケートを踏まえた展示内容



図-1 4 亀の瀬ジオラマ

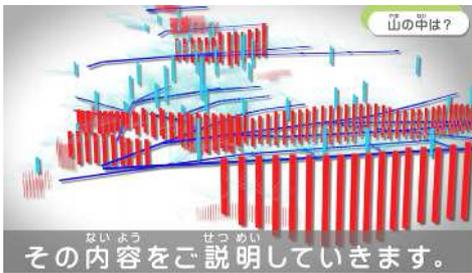


図-1 5 CIMを活用した動画

元民間企業団体「柏原市マイクロツーリズム推進協議会」によるお土産物等の物販や各種イベント開催も実施できるようにするため柏原市マイクロツーリズム推進協議会の活動方針に沿った持続発展的な参画が可能となる運営体制となるよう配慮した。

b) 工夫した点

日本遺産関連のボランティアガイドの方々が、案内しやすい環境を整備するため、案内ルートや案内時間の調整、1日のツアー回数等の調整を行い、ガイドの方の負担にならない持続可能な運営体制になるよう工夫した(図-16)。

地元民間企業団体「柏原市マイクロツーリズム推進協議会」は、令和3年7月に大阪府柏原市の自然環境や産業、文化等の地域資源を活用し、地域の活性化やにぎわいの創出推進を目的として発足。大和川河川事務所では、亀の瀬インフラツーリズムにより地域活性化につながる取り組みとして実施しており、柏原市マイクロツーリズム推進協議会の活動方針に沿った形で亀の瀬インフラツーリズムの取組に参画いただけるよう、実施内容や協定内容について事前協議を重ねた。また、柏原市マイクロツーリズム推進協議会として本格的に稼働するため、組織内の会員に対し亀の瀬インフラツーリズムの考え方を説明するなど丁寧に対応を行った(図-17)。事前協議を踏まえ、令和6年3月13日、柏原市マイクロツーリズム推進協議会と大和川河川事務所間において亀の瀬地すべり対策のインフラツーリズム推進に関する官民連携協定を締結した(図-18)。



図-1 6 新しい資料室前での案内ルート等の調整状況



図-1 7 関係機関との協議状況

(2) 持続可能な運営体制を「つくる」

a) 重点的に取り組んだ点

亀の瀬では、日本遺産関連の地元のボランティアガイドの方々が施設の案内を実施していたため、引き続きボランティアガイドの方と連携し、持続的な運営できる体制の確保を行える体制を構築した。また、地



図-18 亀の瀬地すべり対策インフラツーリズム推進事業に関する官民連携協定書 調印式

### (3) 亀の瀬地区周辺の賑わいを「つくる」

#### a) 重点的に取り組んだ点

これから、亀の瀬地区周辺での賑わいを創出していくために、地域住民の皆さんの思いを結集し、地域みんなで作り上げる亀の瀬地すべりインフラツーリズムを目指した。

#### b) 工夫した点

柏原市マイクロツーリズム推進協議会、関係自治体、や地元住民と合同で亀の瀬地区周辺の賑わいをつくるためのワークショップを開催し(図-20)、自由な発想で新たな亀の瀬インフラツーリズムを核とした観光振興について様々な提案を出しあった。ワークショップ実施にあたっては、全国のインフラツーリズム専門家のJTB総合研究所 河野まゆ子氏や関係者にご協力いただき実施した。

ワークショップは、令和5年12月と令和6年1月の計2回実施。各セッションでテーマを設定し、アイデアを出し合った。また、来場者のターゲット設定や仕掛けづくり(亀の瀬が観光地として選ばれる仕掛け、長く滞在したくなる仕掛け、何度も訪れたくなる仕掛け等)の深掘りの観点からも話しあった。

<ワークショップによるアイデア(一例)>

##### ○アウトドア(アクティビティ)

- ・星空観測
- ・BBQ
- ・読書
- ・野外スクリーン
- ・ドローン
- ・ドッグラン
- ・ピクニック

##### ○地形空間を使ったイベント

- ・坂道マウンテンバイクイベント
- ・スケボーなどのダウンロードイベント
- ・地すべり対策の杭等を意識したイベント

##### ○学びや表現に関するイベント

- ・音楽イベント
- ・すべらない話イベント(滑らない場所)
- ・写真撮影会イベント
- ・トークショーイベント

- ・あなたもガイドになろう(育成イベント化)
- ・環境教室(ビオトープ・ホテル観賞等)



図-20 ワークショップ実施状況

## 4. オープン後の状況と課題

令和6年3月29日の新たな亀の瀬地すべり歴史資料室をオープン以降、約4ヶ月で来場者は約8000人を超え、一般住民、自主防災会、教育機関、行政機関等幅広い年齢の方々が来場しており、柏原市の新たな観光拠点として話題になった(図-21)。

また、来場者のアンケート結果からも、わかりやすい展示とガイドさんの丁寧な説明が好評となっており、新たな亀の瀬地すべり歴史資料室、排水トンネル、旧大阪鉄道亀の瀬トンネルを巡る亀の瀬インフラツーリズムのツアーが大好評な状況である(図-22, 23)。

テレビ取材・放映もあり、認知度が日々高まっており、来場者数が増加中である。

以上のことから、当初から狙っていた新たな亀の瀬地すべりインフラツーリズムを核とした地域の賑わいを創出する拠点整備が成功したと考えられる。

しかしながら、民間団体の取組に関して準備期間が十分とれなかったことから、オープン後にお土産物販売をなかなかスタートできなかったなどの課題も残った。令和6年度に入り、各種イベント等の賑わいづくりの企画立案・実施に向けた検討を進めており、令和6年度後半には順次実施していく予定である。



図-21 新たな亀の瀬地すべり歴史資料室 内覧会



図-2 2 新たな地すべり歴史資料室を訪れる来場者

謝辞：官民連携による亀の瀬地すべりインフラツーリズムの取組についてご協力いただきました、(株)イチバンセン 川西康之氏、東京学芸大学 吉富友恭教授、花田欣也氏、JTB総合研究所 河野まゆ子氏、柏原市マイクロツーリズム推進協議会、大阪府柏原市、奈良県三郷町、ボランティアガイドの皆様、地元民間企業の皆様、その他関係機関の皆様のご理解とご協力に対し深く感謝の意を表し、本報告の結びとさせていただきます。

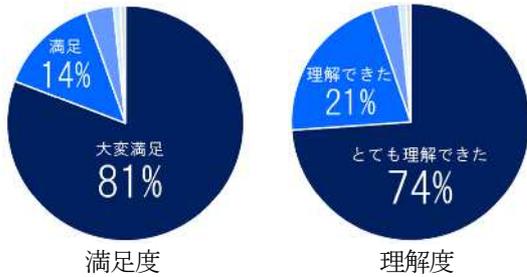


図-2 3 インフラツーリズムアンケート結果

参考文献

1) 国土交通省 総合政策局：インフラツーリズム拡大の手引き拡大の手引き-改訂版- (令和5年11月)

5. 今後の展開

今後、更なる賑わい創出のためのコンテンツ整備や展示物の補強等を行う。また、インフラツーリズム運営体制については、令和6年度の運営状況を踏まえ体制の改良や協定書の見直し等を実施し、持続可能な運営体制を構築する。亀の瀬地区周辺の賑わいについても、新しい社会インフラ施設の利用方法の観点から社会実験等を実施し、亀の瀬地区により活発な賑わいを創出していく。

持続可能な運営体制として柏原市マイクロツーリズム推進協議会が軸になる体制を検討しているが、今後は国が主体となり、地元ボランティアガイドも含めて、まちづくりに関する地元地域の熱意を結集し、持続発展可能な魅力溢れる地域づくりの体制構築を進めたい(図-2 3)。合わせて、地すべり対策施設の見える化や、亀の瀬地すべり対策インフラツーリズムと日本遺産観光の推進を核として進めていきたい。



図-2 3 賑わいを創出するワークショップ参加者の皆様

